

来日への対応は日台関係のパロメーター 李登輝前総統の来日に 条件を付けてはならない

常務理事・事務局長 柚原 正敬



帰台される李登輝前総統を
関空でお見送り
(平成18年1月2日)

昨年十一月一日、台湾の李登輝前総統は本年四月に来日して「奥の細道」を歩いてみたいと表明、十日後の十一日には五月に変更する旨を明らかにされている。来日ほぼ確実とみられ、少なからぬ国民が心待ちにしている。

その後、具体的な時期について、一月十一日付の読売新聞が「五月十日から二、三週間の日程で来日する方向で調整している」と報道し、二十日になって産経新聞が「リタイアした李登輝さんはそんなに偉くない。大したことではない。大騒ぎするから話が込み入る」と麻生太郎外相が記者会見で発言し、李前総統の入国を認めるべきとの見解を示したことを報道している。

先の読売報道では、併せて政府筋

の「李氏のような要人は入国審査対象になる」とのコメントを載せ、「日本での政治活動の有無などを確認したうえ、李氏の入国の是非を判断するとの見通しを示している」と、条件付の入国であることを臭わせている。

しかし、次の産経記事では、麻生外相が記者からの「日本政府が条件を付けるのは不思議だ」という質問に、「あなたの言っていることは全く正しい」と答えたことを紹介している。つまり、これまでの李前総統来日に際し、日本政府は「記者会見しない、講演しない、政治家と会わない」という三つの条件を付けたと言われているが、政府筋発言はそれを踏襲すべきという見解であり、逆に李前総統来日の

是非を判断する立場にある麻生外相は無条件入国とすべきとする見解であることが判明した。

一昨年十二月来日時、本会の小田村四郎会長は、政府に対して無条件入国などを政府に要望した。今回も、すでに中国政府は「入国ビザを発行せず、『台湾独立』分子に講演などの活動の場を提供しないよう」圧力をかけてきている。そこで、一月十二日付で次頁の要望書を小泉首相、安倍官房長官、麻生外相の三者に呈している。

李登輝前総統に対しては、すでに東京江東区の松尾芭蕉記念館はじめ、「奥の細道」ゆかりの埼玉、栃木、宮城、岩手、山形、新潟などの民間団体から招聘状が届けられている。

李前総統来日に日本政府がどのような対応をとるかは、日中関係と日台関係を測るパロメーターと言っても過言ではない。李前総統来日は、政府が毅然として主権国家たる姿勢を示す絶好の機会である。